

# 生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論（５）

清 國 祐 二

はじめに

ファシリテーションにおけるプレゼンテーション

- 1 ファシリテーターの力量形成の必要性
- 2 プレゼンテーション資料の題材と着眼点
- 3 ファシリテーターのプレゼンテーション技能

おわりに

## はじめに

本研究は、参加型学習の方法論に関する継続研究及び実践である。第一報においては、参加型学習の教材研究とそれを活用した教育実践の成果をアンケート調査によって分析した。それを受けて、第二報においてはランキングという参加型学習の一手法に着目し、その意義と効果的活用法を確認し、教材開発の実践力を高める方法を提示した。第三報では家庭教育支援に特化して、一連の参加型学習の展開を示しつつ、新たに開発した教材を用いて、ファシリテーターの役割について詳述した。第四報は、地域における子どもの遊び場とリスクをテーマとする参加型学習のあり方を、日本損害保険協会と連携して検証した。

以上の通り、これまでは参加型学習という方法や形態を用いることで、効果的な学習を展開することをテーマに進めてきた。今回の第五報は、ファシリテーターの力量形成をテーマとしている点で、これまでの研究とは性質を異にする。ファシリテーターの善し悪しが属人的なものであることは否定しがたいが、一方で技術的なことを習得することでファシリテーターに近づいていなければならない、その広がりには期待できない。そこに地域での学びの限界があることは確かで、その限界を克服し、可能性を切り拓くにはファシリテーターの育成は不可避である。学びの活性化や地域づくりのさらなる展開を目指した研究として位置づけている。

## ファシリテーションにおけるプレゼンテーション

### 1 ファシリテーターの力量形成の必要性

本研究で対象としているファシリテーターとは「香川県家庭教育推進専門員（以下、専門員とする）」である。そもそも、本制度は、香川県教育委員会が主催する専門員の養成と派遣プログラムによって成り立っている。平成21年度に開始された「家庭教育推進専門員養成講座」はすでに8回を数えており、200名を越える専門員を輩出している。ただし、派遣の意思を示し登録している人数は100名を切っており、実際に学校園に赴いてワークショップを実施している専門員は50名程度であり、制度的な課題も有している。

しかしながら、香川県教育委員会の取組に学び、その後同様の取組を始めた県もある。鳥取県教育委員

会が主催する「『とっとり子育て親育ちプログラム』ファシリテータ養成講座」（平成23年度以降不定期開講）、徳島県教育委員会が主催する「『とくしま 親なび プログラム』ファシリテーター養成講座」（平成28年度開講）である。これら養成講座には筆者が立ち上げ時から関わっており、その基本となるのは拙稿「生涯学習の推進を図るための参加型学習の方法論（3）」（pp.4-6.、平成21年.）である。これから検討するファシリテーターの力量形成は後発の取組の参考にもなると考える。

さて、香川県における専門員はボランティアであり、準備物や移動にかかる経費のみ教育委員会が負担している。それでも継続して担当してくれるのは、使命感や生きがいであるという。保護者の多くが不安な面持ちで参加するワークショップではあるが、会場を後にする頃には笑顔に変わっている様を見ると、専門員自身も幸せになるという。加えて、ワークショップの回数をこなすことで自分自身の成長も実感できるようだ。頭が下がる思いである。このように本制度は、専門員の善意によって支えられているものであることがわかる。一方で、県行政が県民の善意に頼り続けることでいいのかどうかという疑問も湧く。筆者の答は「ノー」である。そうであれば、次に打つべき手は何か、ということになる。望ましい方向はこの制度を自立させ、持続可能性を担保することだと考えている。そうなると施策の問題となり、本研究の守備範囲を超えてしまうので、本稿では限定して考えたい。

最も長く専門員を務めている方々は8年目を迎えている。専門員は「親同士の学びを取り入れたワークショップ学習プログラム集（第2集）」（平成23年12月）を使いながらワークショップを進行するため、熟練の域に達してきている。それは悪いことでは決していないが、次のステージが見えない中で、永遠に専門員を続けるモチベーションは維持できるであろうか。力のある人ほど徐々に本制度から離れていくことが予想される。そこで、専門員という役割の範疇を超えたファシリテーターとしての力量を向上させることによって、次のステージを作ることを考えた。ある人には「家庭教育推進専門員養成講座」の講師がそれかも知れないし、別の人には専門員を束ねてNPOを組織して仕事に結びつけることがそれかも知れない。自分自身の仕事の質や生活の質をより高めることがそれである人もいるかも知れない。

以上のような観点が、この取組に組み込まれていることを確認しておきたい。

## 2 プレゼンテーション資料の題材と着眼点

ファシリテーターの力量を向上させるといっても、様々な方法が考えられる。ファシリテーターは集団やグループの相互作用を利用しながら学習を展開していく。もちろん、ワークショップのプロセスを考えると、個人作業から入って、グループワークで参加者が「埋没しない」工夫を施してから、相互作用の期待できる討議の場へと移行する。その後、グループごとに一定の成果が出たところで、全体発表を行った後、グループで振り返りを行ったりする。

上記の手続きは、今回想定している専門員にはそのノウハウが獲得されており、クリアーしている。それでは、筆者はどのような能力を伸ばすことを想定したのか。個人作業に入る前に、専門員は必ず教材（ワークシート等）について説明しなければならない。この説明こそ、ファシリテーターと参加者との最初のコンタクトであり、その能力を考える上で欠かせないところではないだろうか。家庭教育について経験豊富な専門員だからこそ、説明が冗長になりがちで、結果的にワークショップで迫りたい主題がぼやけてしまうことがある。短時間で、的確に、できれば強いインパクトを与える説明はできないであろうか。そのような問題意識に基づき計画するに至った。

そのタイミングに、中央教育審議会生涯学習分科会企画部会（平成28年7月15日（金）開催）において有識者によるプレゼンテーションがあり、その内容が筆者の目を引いた。そのプレゼンテーションとは、

上智大学総合人間科学部の奈須正裕教授によって行われた「資質・能力を基盤とした学校教育の創造」である。奈須教授は、中央教育審議会教育課程部会に設置された教育課程企画特別部会における議論及び自身の研究成果を踏まえて報告した。

教育課程企画特別部会とは「新しい時代にふさわしい学習指導要領の基本的な考え方や、教科・科目等の在り方、学習・指導方法及び評価方法の在り方等に関する基本的な方向性について」議論するために設置された部会である。平成27年1月から同年8月まで14回にわたり集中的に審議している。現在、教育界ではPBL（Problem Based Learning あるいはProject Based Learning）やAL（Active Learning）などの課題解決型学習や課題志向学習花盛りであり、これらをどう教育課程に盛り込むかが課題のひとつでもある。これらの議論の流れをいくつかの事例を用いながら、奈須教授は分かりやすく解説した。

今回、私が着目したシートは次頁の2枚である。シート1は全国学力・学習状況調査のA問題とB問題を比較することにより、測定する学力の相違を明確に示している。前者は「何を知っているか」という領域固有な知識や技能を問う問題である。一方、後者は「どのような問題解決を成し遂げるか」という思考力や意欲、社会スキルを問う問題である。平易な表現を使えば、前者は単純な計算問題であり、後者は文章問題（応用問題）である。これらのふたつの問題を見比べる限りにおいては、難易度の差がそれほど大きいとは思えないにもかかわらず、前者96%に対する、後者18%という正答率の極端な違いは、にわかには受け止めがたい。

これをどう説明するかであるが、ひとつの有力な根拠として示されたのがシート2のマシュマロ・テストである。自制心（セルフ・コントロール）は幼児期に身に付く能力であり、その効力は持続するというのである。マシュマロを食べずに自制心を働かせた幼児とすぐに食べてしまった子どもとの差は、大学進学適性検査（SAT）のスコアの差と相関があるというのだ。計算問題と文章問題との間に隔たる正答率の差を「自制心」で説明しようとしたのである。

もちろん、幼児期の自制心と大学進学・就職との関係をあまりに直接的に結びつけてしまうと、無用な誤解を生み出してしまう危険性も孕む。大学進学には、親の経済状況も関係するだろうし、家族の関係性や子どもの友人関係、地域の価値観も関係するだろう。要因を一つに絞り込むことがここでの趣旨でないことは確認しておきたい。しかしながら、全てにおいて多様化が進み、何を手がかりに子育てをすればよいか見えづらい中で、この話題は親の関心を惹きつけ、活用の用途は広い。これがアレンジできないか、ということ考えた。

それが、続く5頁にわたるプレゼンテーション資料である。1シートに1強調点を原則として作成したものである。繰り返しとなるが、聞き手の思いや理解を想像しながら、また飽きさせないように「問いかけること」と「大事なポイントを強調すること」に配慮したことはシート作成の方法から理解がいただけると考える。

## 全国学力・学習状況調査：A問題とB問題

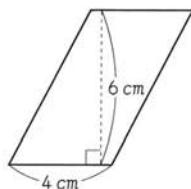
次の図形の面積を求める式と答えを書きましょう。

(3) ひろしさんの家の近くに東公園があります。

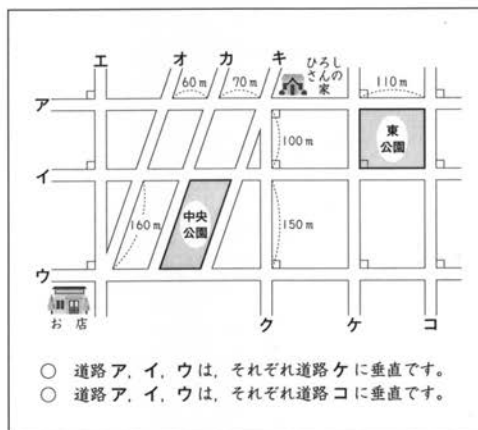
東公園の面積と中央公園の面積では、どちらのほうが広いですか。

答えを書きましょう。また、そのわけを、言葉や式などを使って書きましよう。

(1) 平行四辺形



6年生算数のA問題(上)とB問題(右)  
(平成19年度全国学力学習状況調査より)  
正答率：A問題 96%、B問題 18%



## マシュマロ・テスト

- ▶ ミシェルが、186人の4歳児に行った実験(1970年)
- ▶ 今なら1個、15分待てたら2個のマシュマロがもらえる
- ▶ 1/3の子どもが2個のマシュマロを獲得
- ▶ 1988年に追跡調査：
  - ①自制心の有無は持続していた
  - ②4歳時点の結果が、大学進学適性検査(SAT)のスコアを予測した
- ▶ 非認知的能力の重要性に加えて、幼児教育の質が生涯にわたる可能性を示唆
- ▶ 教育経済学：投資効果が最大になるのは幼児教育、その主要なターゲットは非認知的能力

\* 上記2枚のシートは、平成28年7月15日(金)に開催された中央教育審議会生涯学習分科会企画部会報告資料、奈須正裕(上智大学教授)「資質・能力を基盤とした学校教育の創造」より引用している。



わが子にどう育て欲しいですか？

～這えば立て、立てば歩めの親心～



1

わが子には  
勉強ができる  
ように  
なってほしいですか？

2

そのために  
必要な力  
って  
なんでしょう？

3

それには  
答え  
があるんですか？

4

唯一絶対では  
ないですが  
とても重要な  
視点  
があるんです！

5

そ・れ・は・！

6

自制心  
(セルフ・コントロール)

7

「マシュマロ・テスト」が証明！  
アメリカで行われたミシエルの実験

対象:4歳児186人

○目の前に1個のマシュマロ  
☆15分待てたら2個のマシュマロへ

→ 1/3 が2個をゲット！！

8

18年後の追跡調査！！  
1/3(ゲット組)と2/3(パクリ組)  
どんな違いが生じたか？！

○大学進学適性検査に**大きな差**  
→1/3は大学→安定就職  
→2/3の大学進学率は低い  
無職の若者もいる  
「**自制心**」は持続し、  
未来を規定する！

9

たとえてみましょう！

冬休み明けに  
**試験**  
があります！

10

しかも！

テスト範囲がしっかり  
**発表**  
されています！

11

試験には準備が必要！  
そんなことはわかってる

でも  
**年末年始**  
ですよ！

12

大人だって  
お酒飲んで  
ご馳走食べて

**だらけて**  
いるんです！

13

それでも！

試験準備できる能力？  
「**自制心**」  
ですよね！

14

セルフ・コントロール

自己管理ができる人  
欲望に流されてしまう人  
**4歳で！！**  
決まってるってこと??

15

補足すれば

想像し  
**構想(見通)し**  
**準備(実行)する**  
チカラも必要ですね

16

簡単に言うと  
こんな話でした

17

別の角度からも  
見てみますか？

18

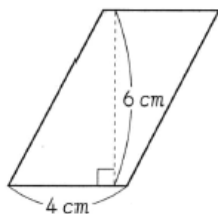
教育委員会も  
一喜一憂する  
全国学力・  
学習状況調査  
から

19

#### 全国学力・学習状況調査（A問題）

次の図形の面積を求める式と答えを書きましょう。

(1) 平行四辺形



20

正解はどうでしょう？

A問題

平行四辺形の面積（底辺×高さ）

$$4\text{cm} \times 6\text{cm} = 24\text{cm}^2$$

<小6生：正答率**96%**>

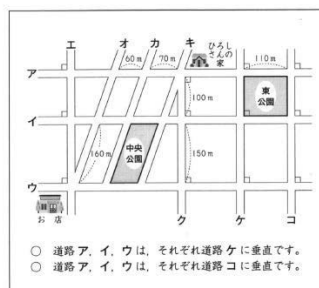
21

#### 全国学力・学習状況調査（B問題）

(3) ひろさんの家の近くに東公園があります。

東公園の面積と中央公園の面積では、どちらのほうが広いですか。

答えを書きましょう。また、そのわけを、言葉や式などを使って書きましよう。



22

正解はどうでしょう？

B問題

$$\begin{aligned} \text{東公園} & 110\text{m} \times 100\text{m} \\ & = 11,000\text{m}^2 (1.1\text{ha}) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{中央公園} & 70\text{m} \times 150\text{m} \\ & = 10,500\text{m}^2 \end{aligned}$$

東公園の方が500m<sup>2</sup>広い

<小6生：正答率**18%**>

23

96%と18%って  
いくらなんでも  
「違いすぎ」  
じゃないですか？

24

その通りです！  
どう考えたって  
「普通じゃない」  
のです！

25

その原因は？

26

自制心の要素  
とも考えられる

やり抜く力  
あきらめない力

27

文章問題・応用問題  
になった途端に  
意欲が減退するのか？

深刻な課題  
と考えないと！

28

以上のような「力」  
総称して

非認知(的)能力  
と呼ばれます

29

では、「測定できる力」  
IQやセンター試験  
これらは？

認知(的)能力  
です。

予想通りでしょうか？

30

特別な「力」ではない！

測定できない  
(数値で示せない)  
「力」なのです

31

だからといって  
侮ることなかれ！

未知の世界  
を切り拓くには  
不可欠な「力」でなんです

32



よりよい「結果」を  
導くために！  
根気強さ  
協調性  
精神力

33

不確実な社会を  
創造できる力を  
どうやって  
家庭で  
育めばよいでしょうか？

37

聞かなかったことに  
してください！

お願いします<(\_ \_)>

34

後、十数年で  
消滅すると  
予測されている  
職業リストです

（英国オックスフォード大学  
オズボーン准教授等の研究から）

35

銀行の融資担当者／電話オペレーター／  
レジ係／ネイリスト／介護士助手／  
ホテルの受付／税務申告の代行者／  
簿記・会計の事務員／不動産仲介業／  
動物のブリーダー／時計修理屋／  
図書館の補助員／塗装・壁紙貼り／  
造園・用地管理の作業員／セラピスト／  
聴覚訓練士／外科医／歯科医／  
小学校教員／心理学者／聖職者  
システムアナリスト／民泊経営者／  
看護師／薬剤師 等

36

### 3 ファシリテーターのプレゼンテーション技能

ファシリテーターは、的確かつ端的に論点を示さなければならない。説明は短く、議論を効率的に、的を外させないようにしなければならない。冗長な説明は時間を浪費し本末転倒であるし、説明不足はその後の議論を混乱させるし、そう考えるとかなり高度な技能が求められることになる。それは間違いないことではあろうが、ある程度はテクニカルに身に付けることができないだろうか。ファシリテーターの不安を解消する手立てがないだろうか。

今回示したプレゼンテーション資料であるが、2枚のシートの中に盛り込まれた内容を聞き手の関心をイメージしながら36枚のシートへ「話しかけるように」「問いかけるように」言葉を削ぎ落としたものである。「行間」は残しつつ、情報は必要最小限とした。これを紙芝居のように次から次へと展開していくと5分とかからない。ゆっくり、語りかけるように、理解を確認するように説明しても10分あれば十分である。

最後のシートは「後の議論につながる発問」という位置づけである。この設定では、幼児期の子どもを持つ保護者に「家庭におけるしつけと非認知（的）能力」について話をしてもらう前提となっている。この設定では、幼児期の子どもを持つ保護者に「家庭におけるしつけと非認知（的）能力」について話をってもらう前提となっている。

さて、キャリアを積んだ家庭教育推進専門員に次のステージを準備するために、スキル向上の機会を提供する必要があることは最初に述べたとおりである。ファシリテーション技能には議論等を「まとめる力」や「整理する力」、「要約する力」、「板書（メモ）する力」が含まれている。これらをテクニックとして習得させるプログラムが求められる。平成28年度末には、実験的にファシリテーター専門研修を実施し、その成果を検証し、平成29年度以降に効果的なプログラムを開発する計画としている。

テクニックのみならず、当然内容こそが重要である。過去の研究報告で取り上げた家庭教育推進専門員養成講座を修了した人は200名を越える。専門員としての活動はなくとも、何らかの成果をもって、それぞれ活動している。家庭教育の経験豊富な方々にはスキルの伝授をすれば、そして力を発揮できるステージを準備すれば、人材育成と活用は広がっていく。一方で、香川県教育委員会として取り組んだ8年の実績によって、香川県の家庭教育の質が確実に高まっているかどうかといえば、心許ないところである。親や子どもを取り巻く社会環境の変化の方が明らかに影響を強く与えている。「スマホ育児」や児童生徒のネット依存度の高まりは、質の向上ではなく、「質の変化」をもたらしている。「質の変化」が人としての成長発達にプラスに働けばよいが、どうやら新たな社会問題を生みそうである。この世の中の流れにどう対応し、自走体制を構築するかも、制度を維持する上でとても重要なことである。

### おわりに

参加型学習が、ワークショップが、広く普及することは、不確実な社会や課題多き社会を再構築していく上で欠かせない。少数の有能な人が設計図を描いて、同調するもう少し多くの人々がその達成に奔走すればよかった時代は終わった。課題の多くが人々の結びつきが弱まり、関係性が分断されることによって生み出されているからである。例えば、貧困や格差は長い歴史の中でも同じように存在していたが、人々の結びつきがそれを乗り越えさせていた。人々は孤立していなかったのであり、地域社会の機能は生きていた。第一次産業中心の社会では地域総出で共同することもしばしばで、共助が当たり前であった。分け合い、分かち合う共助社会であった。貧しい時代だからこそ、貧困や格差を乗り越えられたという、なんとも皮肉である。

参加型学習やワークショップは、つながりや関係性を再生する方法論でもある。参加型学習で相互に学び合うことで共感が生まれ、目的を共有し、参加者のパワーを次へとつなごうとするのである。できるだけ、多くの場面、日常の中でそれが広がっていくことが望まれる。その前提に立てば、ファシリテーターが名人芸のままであり続けてはならない。万人がというわけにはいかないが、一定の素養を持った人であれば、一定のマインドとスキルを手に入れば、その力が発揮できなくてはならない。その取組の一つが今回の報告となっている。